

病害虫の防除をしっかりと行いましょう！

7月は「いもち病」「稲こうじ病」防除の時期です 周辺ほ場を巡回し「ばか苗」の除去を

1 水管理

(1) 幼穂形成期～穂ばらみ期

この時期は、籾数や籾殻の大きさが決定する重要な時期ですが、一時的な低温により不稔障害が発生しやすい時期なので、天候に注意して水管理を行うこと。

ア 幼穂形成期に入ってから低温が予想される場合は、予め10cm位の深水管理を行い保温に努める。

イ 特に、減数分裂期から穂ばらみ期は低温に最も弱い時期なので、日照時間が少なく日平均気温20℃以下（最低気温17℃以下）の日が続く場合は、深水(可能であれば17～20cm)処理で保温し、不稔障害の発生を防止する。

(2) 出穂期

ここ数年、出穂期ころは高温となっている。水管理による高温対策を行う。

ア 高温対策として用水のかけ流しを行い、地温と稲体の温度上昇を抑えること。

イ 特に、出穂時は、水を大量に吸収するので、水を切らさないようにする。

2 本田管理

県の検査員による出穂期のほ場確認（審査）が7月下旬～8月に行われるので、その前にばか苗や雑草等の抜き取りをしっかりと行うとともに、倒伏防止に努めること。

ほ場確認の基準（最高限度） <秋田県主要農作物種子検査要領別記2から抜粋>

変種、異品種及び異種類の農作物	雑草	種子伝染性の病害及び虫害	その他の病害及び虫害並びに気象被害	農作物の生育状況
含まないこと	小発生であること	含まないこと	20%	特に異常な生育を示していないこと

(1) ばか苗の抜き取り

胞子が形成されてからの抜き取りでは手遅れなので、早急に抜き取りを完了すること。

(2) 除草等

ア 条間等の実生株や異形株等は確実に除去すること。

イ ヒエなど、雑草を確認したら抜き取り等による除草を行うこと。

ウ 斑点米カメムシ類防除の草刈りは、出穂の10～15日前までに数回行うこと。

(3) 追肥

生育・栄養診断に基づき行うこととし、追肥量は慎重に判断すること。

3 病害虫防除 ～ 時期が遅れないよう確実に実施する ～

(1) 必須防除(いもち病、稲こうじ病)

① いもち病

穂いもち防除は次表のいずれかで行うこと。

防除体系	薬剤名	散布量(10a)	散布時期
地上防除	コラトップ粒剤 5	4kg (もみ枯細菌防除兼ねる)	出穂の7～15日前
	コラトップ豆つぶ	250～375g (375gは ")	
	コラトップ1キロ粒剤 12	1～1.5kg	
無人航空機防除	コラトップ1キロ粒剤 12	1kg	

② 稲こうじ病

防除は次表のいずれかで行うこと。

防除体系	薬剤名	散布量(10a)	留意点	散布時期
茎葉散布	Zボルドー紛剤DL	3～4kg	高温時は薬害が生じやすい	出穂の10～20日前
	ドイツボルドーA	2,000倍液 100～150L		
水面施用	モンガリット粒剤	4kg (水を張って散布)	散布後の入水は水が無くなってから	
無人航空機	モンガリット1キロ粒剤	1kg (水を張って散布)		

※ モンガリットは紋枯病の防除兼用。

(3) 必要に応じて防除(紋枯病)

穂ばらみ期～出穂期の発病株率が15%を超える場合は、次表のいずれかで防除を行うこと。

ただし、粒剤による防除は前年に多発したほ場を対象とする。

防除体系	薬剤名	散布量(10a)	散布時期
水面施用	リンバー粒剤	4kg	出穂の5～15日前
茎葉散布	モンセレンフロアブル か モンカットフロアブル	1,500倍 150L	出穂直前～穂揃期
	モンカット水和剤	1,000倍 150L	
無人航空機	モンセレンフロアブル か モンカットフロアブル	8倍液 800ml	

4 気象情報

気象庁の1か月予報(6/24～7/23)によると

- ・ 暖かい空気に覆われやすいため、向こう1か月の気温は高い見込み。特に、期間の前半はかなり高くなる見込み。
- ・ 降水量はほぼ平年並み。日照時間はほぼ平年並みの見込みとなっている。

5 病害虫の発生予察情報

秋田県病害虫防除所が発表(6月27日)した7月の主な病害の発生予報は次のとおり。

病害虫名	発生時期	発生量(前年比)
葉いもち	早い	やや多い (多い)
稲こうじ病	やや早い	やや少ない (前年並)
紋枯病	やや早い	多い (多い)
斑点米カメムシ類 (第1世代成虫)	アサツカスミカメ	早い 多い (前年並)
	アカヒゲホミドリカスミカメ	早い 多い (前年並)

たね屋から ひとつこと
○ 熱中症に注意しましょう。
○ 生育は、ほ場間差が大きいので、状況を確認しながら管理しましょう。

次号 出穂期編は、8月上旬発行予定です。